

中国泉州堤線木偶戲「目蓮戲」の「李世民遊地府」

著者	細井 尚子
雑誌名	芸能の科学
号	24
ページ	175-223
発行年	1996-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00003044/



中国泉州提線木偶戲「目蓮戲」の「李世民遊地府」

細井尚子

はじめに

一 泉州提線木偶戲の「目蓮戲」

二 「李世民遊地府」実見記録

三 「李世民遊地府」にみる演技演出

四 「李世民遊地府」の構成

おわりに

はじめに

中国福建省泉州の提線木偶（糸操り人形）は、唐末に王審知（八六二～九二五）が閩国を建て閩王と称した際、中州から提線木偶の道具一式も持ち込み、宮中で娯楽として楽しんだことに始まるとされる。⁽¹⁾宋代には都である現杭州で福建の傀儡戯一社三百人余りが上演したという記述があり、すでにかなり盛行していた証とされている。明万暦年間（一五七三～一六二〇）には生・旦・北・雜の四種の役柄ができ、四人の演者で行う「四美班」という形態になった。演目も「落籠簿」四十二本を持つに至り、また用いる人形三十六、頭四十五個、曲調・唱腔では傀儡調として三百あまりの曲牌が固定した。清道光年間（一八二一～五〇）以降「目蓮」「西遊」「水滸」「説岳」が演目に加わる（「目蓮」「西遊」は「落籠簿」にある「四海龍王賀寿」一本を増補したとされる）。これらは「籠外簿」（散簿）と呼ばれ、各々七日七晩の上演時間をもつ。演者も一人（貼）追加されて「五名家」となり、頭も神仙の類を表わす花臉、鬼臉が加わって七十～八十に増加した。道光年間から民国（一九一一）初期までの百年余りの間は泉州の提線木偶戯の最盛期で、泉州の木偶班は大小あわせて六十班を越え、班員も三百人以上に及び、またシンガポール、フィリピン等での公演も行っていた。⁽³⁾

この泉州提線木偶戯の「目蓮」の内、本稿では九五年二月に実見した「李世民遊地府」を取り上げる。この調査は九二年より筆者個人で行っていた調査の延長上で行われたもので、日本学術振興会の研究助成を受けて九五年四月より開始された国際共同研究の日本側メンバーが、事前調査として私費で訪中し、採録した資料を用いた。

一 泉州提線木偶戲の「目蓮戲」

泉州提線木偶戲の「目蓮戲」は、「李世民遊地府」六套、「三蔵取経」六套、「目蓮救母」十六套からなる。套は幕や段に相当し、一日に午前一套、午後一套、夜二套の四套上演し、七日で終了する。⁽⁴⁾中元節に行われる普渡（あの世から帰ってきた諸霊、特に無縁仏の供養）の際には必ず上演されていたが、新中国成立後一九五一年に始まった戯曲改革工作により停演となった。

しかし八十年代中葉からの「優秀なる民族文化の発揚」をめざした一連の動きと、国内外の研究者による「目蓮戲」の学術シンポジウムの開催が流れを作り、泉州提線木偶戲でも「目蓮戲」の台本整理作業が始まった。提線木偶戲は必ず台本を用いて上演する。収集された台本は木偶班によって相違があり、校訂作業に時間を要したが、九四年八月の段階でその作業はほぼ完了したという（泉州地方戯曲研究社談）。

一九五二年成立の泉州木偶劇団では、「目蓮戲」の核を成す「目蓮救母」を楊度氏（一九二三～九五）が若手の団員に実技指導し、八六年に「会縁橋」など一部を試演、九一年に泉州で開催された「南戯目蓮戲」国際研究会で、一部が上演された。⁽⁵⁾

「李世民遊地府」の脚本、曲本は九二年九月には校訂が終了、その後楊度氏による実技指導を経て九五年二月に試験的に上演された。「三蔵取経」は脚本の校訂は終わっているが、楊度氏の体調が悪化し、九五年八月に逝去されたため、実際に稽古をしながらの実技指導は間に合わず口頭による指導で終わった。泉州木偶劇団にとっては、成立当初すでに演者として舞台経験を持ち、高い評価を得ていた上「目蓮」に通曉していた最後の人を失ったことになり、上演までにはしばらくの時間がかかりそうである。

二 「李世民遊地府」実見記録

「李世民遊地府」の実見記録は上段に粗筋、下段に人形の出入りを記した。(一八二頁以下) 採録した際の舞台は伝統的な形態である「十枝竹竿三領被」(十本の竹と三枚の布) に準じた仮設舞台で、図1、2のようになっている。舞台中央に置かれた高さ約一〇〇センチ、幅約一二〇センチの幕を屏と呼び、この屏の後ろに演者が立ち、屏の前で人形が演じる。舞台の幅は屏三つ分が基本で、舞台は正方形をしている。

図1 上から見た舞台

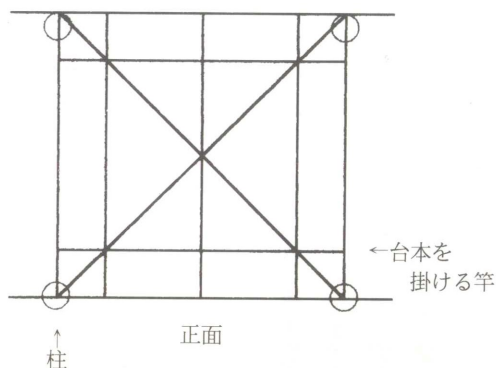
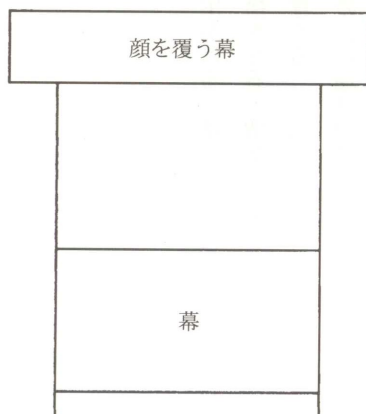


図2 正面から見た舞台



実見した際は一日三套、二日間で上演した。記載は上演回ごと(套)に分け、また各折(ひとつの套にいくつかの折がある。折は場に相当)の名称を、実見した際用いられていた脚本表記に従って記した。各折を①②といった記号で分けたが、これは筆者が人形の動きによって分けたものである。

登場人物の名称は、現地で用いられているままに表記し、翻訳していない。また各登場人物は初出の際人物名の後ろに頭の役柄分類と遣い手の役柄分類を(頭/遣い手)の形で記した。役柄分類は生・北(浄に相当)・雑(丑に相当)・旦の大部分類を使用した。尚、遣い手の役柄分類は伝統的な約束と実見記録が異なる場合、前者を記した。各折の上演時間は約九十分である。

「李世民遊地府」実見記録

採録日 九五年二月十二日・十三日

採録地 泉州木偶劇団

演者 泉州木偶劇団青年隊

〔粗筋〕

唐太宗(李世民)の御代、長安の貧乏書生劉全は生活のため商売に出かける。迦菩提祖師は劉全の祖先の積善に報いるため劉全夫婦の運命を決め、僧に変じて劉の妻何翠蓮に金の簪を喜捨させる。僧から簪を見せられた劉全は妻の不貞を疑い、何氏は自殺する。妻の無実を知った劉全は冥府での再会を決意する。

西河龍王は、袁天罡と雨の降る時刻と量の賭けをする。天帝から袁の占い通りの降雨の指令がくるが、龍王はわざと指令を違えて雨を降らし、その罰で処刑されることになる。刑を執行するのは宰相魏徵なので、太宗に助命を請う。太宗は承諾し、処刑の時刻に魏徵を召して碁を打つ。魏徵はうたた寝し、夢の中で龍王を処刑する。龍王は閻君に太宗を



第四套「遊地府」の「地府」② (p.194)
下手より崔珏、李世民、青衣童子、城門内に建成

訴える。閻君は裁判のため太宗を地府に召す。魏徴は友人で、地府の判官を勤める崔珏に、太宗の還陽を頼む手紙を書き、太宗に託す。崔は太宗の寿命を延ばし、龍王の怒りを解くため太宗の妹を龍王に嫁がせることにする。閻君は太宗を還陽させることにし、地府見物をさせる。太宗は亡者に施しをするために、功德州の水売の相良が地府に送っていた金を借りる。還陽後、借金を返済するとともに、地府に謝礼を届ける使者を公募する。

劉全は使者となって地府に赴き公務を果たした後、妻と再会、妻と一緒に帰らぬと言い張る。何氏の屍体はすでに腐敗しているので、寿命の尽きた太宗の妹の体に何氏の魂を入れて還陽させる。

劉全は還陽し、参上して太宗に報告する。何氏も還魂し、太宗は劉全と妹（何氏）を結婚させ、三品に叙す。

○第一套「化金簪」

「慶功臣」

①唐の太宗（貞観帝）李世民（唐王）の治世、天下は安泰。

②唐王は諸臣を集め、天下を安定させるには何が大切かを問う。諸臣は「善に則ることが肝要」と奏上、帝意と合致する。

③唐王は税を軽くし、刑罰を減らし、軍威を軽減して庶民と共に幸せに暮らす事とし、それに反した者は厳罰に処すとの令を下す。

「化金簪」

①長安の劉全は父母を早く亡くし、貧しい暮らしをしている。科挙のために勉強してきたがうまくいかない。科挙のために勉強してきたがうまくいかなので、商売をすることにする。妻の何翠蓮とは結婚して三年あまり、二人の間に子はないが妻は貞節で夫婦仲も良い。

②劉全は妻に自分の決意を伝え、一年か半年で戻ることから儉約して暮らせと言って出発する。

③何氏は別れを惜しむ。

④世の中の善悪を定め、富貴貧賤寿夭を司る、天上界の迦菩提祖師は「劉全の祖先には積善の功があり、その子孫に報いるべき。劉全はすでに両親ともなく、子もない。劉全夫婦は半世の縁で、後になつて偕老の夫婦となる。唐王の妹の寿命が尽

○第一套「化金簪」

「慶功臣」

①舞台中央に机（大）二人の太監（宦官Ⅱ雑／雑）上手下手より一人ずつ登場。互いに拝礼後、舞台端上手側と下手側に両手を前に軽く曲げた形で一人ずつ掛ける。

太宗李世民（唐王Ⅱ生／生）下手より登場。
②下手から武官二人（北／北）、上手より文官二人（生／生）登場。

③文武官、登場した口に退場。唐王上手に退場。舞台端に掛けられた二人、互いに拝礼後上手と下手に一人ずつ退場。

「化金簪」

①劉全（北／北）下手より登場。

②何氏（旦／旦）、劉全に呼ばれ、唱しつつ下手より登場。何氏下手側、劉上手側に椅子に座り向かい合う。劉下手に退場。

③何氏上手に退場。

④迦菩提祖師（雑／雑）下手より宙を浮き登場、舞台下手より中央で着地。

きるので、その体に何氏の魂を入れ、蘇生させて劉全と結婚、劉全には三品の大夫の禄をとらせよう」と決める。

⑤ そして劉全と何氏をこの世とあの世に分け、三年後に再び一緒にさせるため、僧に変身する。

⑥ それらしく見えるかどうかと水鏡、喰えない坊さんになっていたが、まあいいかと布施を乞いに行

く。

⑦ 何氏は夫の身を案じ、早い帰宅を願って暮らしている。

⑧ 今日、朔日、香をあげ夫の無事を祈っていると、普救寺の長老と名乗る僧（迦菩提祖師の化身）がやってくる。

⑨ 中元節に衆生を超度し、無縁仏を供養するための布施を求められ、何氏は何もないと断わる。しかし布施が善を積むと説得されて、結局髪にさしていた銀三両に値する金の簪を布施する。

⑩ 喜んで僧が施主の名を尋ねると、何翠蓮、夫は劉全と答える。何か願いた事はと尋ねられた何氏は、夫の無事と早い帰宅をあげる。僧は、大層な布施をしたのだからきつと商売が大成功して帰つてくると言い残して去る。

⑪ 劉全は一年余りぶりに故郷に戻る帰途、布施を乞

⑤ 迦菩提祖師舞台中央で上昇、屏を越えて退場。同時に同じ位置から屏を乗り越え迦菩提祖師の化身である僧（雜／雜）登場。僧、着地と同時に三度くしゃみ。

⑥ 下手側に一步前に踏み出し、上半身を屈めて水鏡の様子。唱しつづ上手に退場下手より登場を二度繰り返し、三度目に上手に退場。

⑦ 何氏下手より登場。上手に退場。

⑧ 舞台中央に香炉一式を置いた机（小）。何氏下手より登場。祈りの後上手へ退場。机上の香炉一式のみ掃く。下手より再登場。僧下手より登場。

⑨ 何氏は髪から簪を抜き机上に置く仕草。僧はそれを机上から取る仕草。簪は作り物を用いない。

⑩ 僧下手より退場。何氏上手より退場。

⑪ 劉全唱しつづ下手より登場上手に退場。僧唱しつ

う僧に出会うが何もないと断わる。僧は喜捨をすれば報われると、梁の武帝の前世は木樵で、人々のために溪谷に橋を掛けた功績で、玉帝の命で皇帝になったのだ、お金を固執して俗に迷うなど強い口調で劉全に布施を求める。

⑫ 劉全は自分の境遇が全く報われていないと嘆き、お金がないから布施できないのであつて、それをその言い方は何だと怒り出す。僧は堂々たる男のくせにと貧しいのに金の簪を喜捨した奇特な女性の話をする。

⑬ 劉全が作り話だと信じないので、僧は金の簪を出してみせる。劉全はこの簪を見て妻のものではないかと疑い、どこでどうやって手に入れたと僧に迫る。僧は何氏の名とその夫の名、夫は商売のため外地に行つて留守、金の簪で縁を結んだと告げる。劉全は驚き、妻が不貞をはたらいたのではと疑う。

⑭ 何氏はそんな事とはつゆ知らず、今日も夫の身を案じて暮らしている。

⑮ 劉全は怒りのあまり、疑いを確信にして帰つてくる。そして妻の言葉も聞かず、不貞を責める。何事かと当惑する何氏に、金の簪はどうしたと詰める劉全。普救寺の僧に喜捨したと答えるが、劉全は信じない。

つ上手より登場下手に退場。各々二度繰り返して、三度目に舞台中央でぶつかる。

⑫ 僧と劉全の会話は滑稽味溢れる。

⑬ 僧上手に退場。劉全、飛び跳ねるようにして怒りを表現、上手に退場。

⑭ 何氏下手より登場。上手側の椅子に座り、唱の後上手に退場。下手より紅(赤)鬼、火牌を掲げ持ち宙を飛んで登場、舞台中央で宙に浮いたまま手招きする。それに応えて下手より女吊死(縊死)鬼(雑ノ北)登場。黒衣で首に回した白い縄の両端を両手で持つ。一緒に上手へ退場。劉全下手より登場上手に退場。

⑮ 劉全下手より登場。何氏上手より登場。すぐ後ろに女吊死鬼ついて登場。何氏が劉全の傘を受け取るうとする。劉全は傘を妻に投げつけ、その傘を女吊死鬼が受け取って下手に退場。女吊死鬼下手

① 何氏はあまりの事に、死んで身の潔白を晴らそうと首を吊る。書童が葬式をしなくてはと勧めるが、劉全は自分の顔に泥を塗った女だと取り合わず、却って書童に自分の留守中の何氏のふるまいについて詰問、何もなかったと答えても信じない。

② 葬式もやらず、騒ぎになるのもいやな劉全は、書童に僧を呼びに行かせる。やってきたのはあの僧だった。

③ 事の次第を聞いた僧は、無実の罪で死んだ何氏を哀れみ、劉全を責め、西天に向かって飛び去る。それを見た劉全は、僧が人ではないことを知り妻が無実であったことを知って嘆く。そして二度と妻を娶らず養子も取らず、あの世での何氏との再会を決心する。

○ 第二套「袁天罡」
「漁樵会」

① 近頃水族がどこへともなくいなくなってしまうので、その理由を探れという西海涇河龍王の命を承けた亀相が、木樵に変身する。柴を町で売って

より登場。劉全の後ろに立つ。無言だが前傾姿勢を取ったり、両手で持った白縄を扱い、劉全にけしかけるようにしたりと動きで劉全夫婦の会話に参加。劉全は激昂して唱、女吊死鬼下手に退場。女吊死鬼上手より登場、何氏の背後に位置する。両手を持ち上げ首吊りの様を二度する。舞台端に寄り、何氏に向かって跪いてお辞儀と首吊りの様の真似を数回繰り返す。何氏は引きずられるように死を決意、上手に退場。女吊死鬼も後をついて上手に退場。書童（大童／雑）上手より登場。劉全と書童ともに上手に退場。何氏の遺体を縄から外す様を屏の後ろから遣い手の声のみで表現。劉全と書童、上手より登場。僧下手より登場。

② 僧は回転しつつ宙に舞い上がり、屏の上を越え、上半身を屏の上から観客に向けて乗り出し退場。劉全這いながら上手に退場。

○ 第二套「袁天罡」
「漁樵会」

① 亀相（北／北）上手より宙を浮きながら登場。回転しつつ舞台中央の位置で上昇、屏の上を越えて退場。同時に同じ位置から屏を越えて上から化身である木樵（北／北）登場し、上手に退場。

米に換え、親に孝行しようと下山中、王嬉という八十四歳の漁夫とぶつかる。

②なぜ漁夫が山にきたのかという木樵の間に、王は母方の叔父の娘が皇宮に入ったので、その祝いに大物を釣ろうと袁天罡に占ってもらい、ここに来たと告げる。木樵は山に魚がいるものかと信じない。

③しかし漁夫は占いの通りに山の石穴の中から大物を釣り上げる。驚いた木樵は滑ったふりをして魚を逃がし、漁夫の腕を褒め、弟子入りしたいともちかける。漁夫はすべて袁のお蔭と喜んで去る。

④木樵に変じていた亀相は、水族が袁の占いのせいで捕まるのを恐れて逃げ散ったのだと知り、急いで龍王に報告しに帰る。

「回報」
①玉帝の命を承け雨風雷を司る西海龍王の放廣は、亀相はまだかと待っている。そこへ亀相が戻り、全ては袁の占いの仕業と報告、報復のために袁の住む吉州城を水浸しにして殺す案を奏上する。龍王は、吉州城は玉帝から三年の早魃の命が下されており、降雨の許可を得ていないとこの案を退け、自ら書生に変身して袁天罡の力量を確かめに行くことにする。

下手より王嬉（雑／雑）登場上手に退場。木樵上手より登場、下手に退場。各々二度繰り返し、三度目に舞台中央でぶつかる。

②木樵と漁夫の会話は滑稽味溢れる。

③二人一緒に上手に退場、下手から再登場。木樵は滑ったふりをして片腕を振り回し魚を逃がす様。魚は作り物を使わない。王下手に退場。

④木樵は回転しつつ上昇、屏を越えた後、上半身を屏の上から観客の方へ乗り出してから退場。

「回報」
①水族（官衣を着けた人Ⅱ生／生）上手、下手より一人ずつ登場、互いに拝礼後舞台端の上手側と下手側に両手を軽く曲げた形で一人ずつ掛け。龍王（北／北）下手より登場。中央の机（小）の後ろに座る。亀相下手より登場。下手側に跪いて報告後立つ。龍王立ち上がり上手に退場。亀相下手に退場舞台端に掛けられた二人、互いに拝礼後上手と下手に一人ずつ退場。

「城隍奏」

① 玉皇の所へ吉州城の城隍が参上、大旱魃と飢饉による吉州の人々の惨状を訴え、早く雨を降らせてほしいと奏上する。玉帝は吉州の旱魃は天地輪転によるもの、大雨を降らせ草木に命を与えようと明日辰時に雲を起こし、巳時に雷鳴、雨を降らせ始め、未時に止ませる。雨量は一万八百籌一籌十萬八千粒、城外の水深七尺、城内の水深三尺五寸降らせすぎは命を奪うので許さぬという命令を西海龍王に伝えるよう玉靈官に指示する。

「栽菜」

① 袁天罡は、龍王の化身である書生がもめ事をもちかけに来る事をすでに知っており、その対処にと野菜を植えている。

② その書生がやってきて、大旱魃に野菜を植える詔を袁に尋ねる。袁は、明日辰時に雲が起こり、巳時に雷鳴起こり、雨が降り、未時に降り止むと応える。そして雨量は一万八百籌、一籌十万八千粒の雨、城外の水深七尺、城内の水深三尺五寸に及ぶと告げる。雨風雷は龍王自身が司っているのだからこれはしつと袁天罡に賭けをもちかける。雨が降らねば袁は占いの書を焼捨て、雨が降れば書生が首を袁にやることになる。

「城隍奏」

① 中央に机を二つ重ねる。四神各々武器を持ち、下手側から馬元帥（生／生）趙元帥（北／北）康元帥（北／北）温元帥（北／雜）の順で屏の上から登場。名乗り後、舞台端下手側に馬趙、上手側に康温を掛ける。玉皇（生／生）下手から宙を浮き上手側に天師、下手側に上帝を従え登場。城隍（生／雜）下手より登場。下手に退場。玉靈官（北／北）下手より登場。下手に退場。玉皇は天師と揃って上帝上昇、屏の上を越え、上半身だけ観客側に乗れり出し退場。四神も同様にして退場。玉靈官白馬に乗り、宙を浮いて下手より登場。上手に退場を繰り返す（要求は一〇八巡）。最後は屏の上を越え、上半身だけ観客側に乗り出し退場。

「栽菜」

① 上手寄りに机（小）脇に幡をさす。袁天罡（生／生）は八卦衣に払子を持ち、下手より登場。

② 下手より書生（龍王の化身Ⅱ生／北）登場。書生下手に退場。袁、下手に退場。

「議計」

① 龍王が戻ったところに玉帝の使者がやってきて、袁の占いと全く同じ内容の命令を伝える。

② 龍王は玉帝の命に背けず、かといって首もやりたくないと思ふ。亀相が雲、雷、雨の時刻を一刻づつずらし、雨粒を一万粒減らせば、雨を降らせという玉帝の命令に背かず、袁の占いとは違うので首もやらずに済むと献策、龍王はこの案を採用する。

「落雨」

① 雷公雷母、風伯、雨師は玉帝の命と龍王の指示が異なっていたので龍王に従う。水が城外から城内に流入、城内の水深が七尺に達し、多くの人が溺死する。これは龍王のせいと皆で玉帝に報告しに行く。

「焼卦書」

① 袁は龍王の行為を、自分の身に災いを招くことなのにと、その見識のなさを笑っている。

② 龍王の化身である書生がやってきて、雨が降った、占いの書を焼けと迫る。

③ 袁は書生に対し、「龍王」と呼びかけ、天の掟を犯した罪で明日午の刻に処刑されるぞと言う。驚いた龍王はどうすべきかと袁に助けを求める。袁は処刑は貞観帝の臣、魏徴がするから、急いで唐

「議計」

① 龍王は宙を浮きながら下手より登場。屏の後ろで玉靈官到着の声、龍王下手に退場。下手から宙を浮きつつ玉靈官登場。龍王上手から登場。上手側に跪き拝命。玉靈官、回転しつつ上昇、屏の上を越え、上半身だけ観客側に乗り出し退場。

② 亀相下手より登場。亀相下手へ退場。龍王上手へ退場。

「落雨」

① 上手より雷公（雷公／北）雷母（旦／旦）風伯（生／生）雨師（北／雑）の順で屏の上を乗り越え登場。名乗り。唱しつつ各々回転。宙に浮き上手に退場下手より登場。各々回転。回転しつつ昇、屏の上を越え、上半身だけ観客側に乗り出し退場。

「焼卦書」

① 舞台は「栽菜」に同じ。袁、下手より登場。

② 書生屏の後ろで一段唱いた後、唱しつつ下手より登場。

③ 書生下手に退場。袁、下手に退場。

王の所へ行き、龍王と唐王は生年月日が同じだから、自分が死ねば唐王の命も安泰ではないと言つて頼めば、徳行の君主である唐王は何とかしてくれるだろうと教える。龍王は礼を述べ、唐王の所へと急ぐ。袁は天の掟を犯して罪を逃れるのは難しいと咄く。

○第三套「斬龍王」

①唐王は史書を読み、昔の明君に思いを馳せつつ、うとうとする。

②夢に龍王が現われ、命乞いをする。唐王は玉帝の命では自分ではどうしようもないと断わるが、龍王は袁に教わった通り訴える。唐王は結局は命を助けると約束する。龍王は喜び、贈り物をして去る。

③目覚めた唐王は不思議な夢を語るが、机上の贈り物を見てどうしたものかと考える。そして魏徴と尉遲恭を召し、盃を交しつつまず魏徴と、次に尉遲恭と碁を打つ。

④尉遲恭と唐王が碁を打つ脇で魏徴はうたた寝をし夢の中で龍王を処刑する。

⑤尉遲恭に咎められて目覚めた魏徴は、夢で見た不思議な出来事を語る。唐王はその内容に驚き、慌てる。

○第三套「斬龍王」

①舞台中央に机（大）二人の太監上手下手から一人ずつ登場。互いに拝礼後、舞台端上手側と下手側に両手を前に軽く曲げた形で一人ずつ掛ける。唐王下手から登場。

②龍王、頭は龍王、衣装は書生の形で下手より登場下手側に跪き唐王に訴える。下手に一度退場、机（小）とともに再登場。机は下手側舞台端寄りに置く。贈物がのっている意味を表わす。龍王下手に退場。

③上手より魏徴（生／生）、下手より尉遲恭（北／雄）登場、唐王の両隣で拝礼後着席。下手側の太監、唐王の命を受け下手に退場、碁盤（作り物使用せず）を持つ仕草で下手より登場、唐王の机上に置く。

④魏徴上半身を唐王の方に傾げうたた寝の様。寝言で処刑の命を出す。

⑤尉遲恭に咎められ目覚めた魏徴、驚き上手側に跪く。

⑥午門の外に空から龍王の首が落ちてくる。唐王はその首に許しを請い、丁重に葬る。

「龍王嘆」

①龍王は約束を違えた唐王を恨み、閻君に唐王の不実を訴える事にする。

「囑国事」

①唐王は心痛から病になる。唐王の夢に龍王が現われて責めるが、左右の星君に守られているので近づけぬ、閻君に判断してもらおうとあの世へ去る

②目覚めた唐王は魏徵と尉遲恭を召し、龍王が来たので自分の命は長くないと伝え、龍王の幻覚に苦しむ。魏徵は、自分の友人である地獄の十殿の総判の崔珏（崔総判、崔判）宛に、手紙を持っていくよう唐王に勧める。

③功德司が唐王を陰府に案内するため迎えに来る。

⑥屏の後ろで龍王の首が落ちてきた報告の声、唐王の命で武將（北／北）が白布で包んだ首を持って下手より登場、下手側に跪く。首を持ち下手に退場。唐王、魏徵、尉遲恭は跪き龍王に三度拝礼。魏徵と尉遲恭で唐王を両脇から支え下手に退場。

「龍王嘆」

①龍王下手より登場。舞台中央でつまずき転びひっくり返って両手を振り回す。起き上がり上手に退場。

「囑国事」

①舞台中央に机（大）。唐王、二人の太監に両脇から支えられ下手より登場。唐王は頭に带状の白布を巻き、斗蓬（マント）着用（病の表現）唐王机の後ろに座す。太監唐王の両脇に侍す。屏の後ろで龍王の恨みの声。太監前に屈んで怯えを表現。二人の太監上手下手に一人ずつ退場。唐王机上に伏す。龍王下手より登場。唐王の魏徵と尉遲恭を呼ぶ声に龍王驚き下手より退場。上手より魏徵、下手より尉遲恭登場。魏徵手紙（作り物使わず）を唐王に渡す。

③功德司（生／雑）笏を持ち下手より登場。出発を告げ下手に退場。功德司上手より登場、唐王の遺言が終わるのを待つ。唐王死去と同時に功德司上手に退場。魏徵と尉遲恭、唐王を両脇から支え上手に退場。魏徵上手より、尉遲恭下手より登場。

「陰司界」

① 功徳司は唐王が人王なので馬を用意し丁重に扱う界」と彫られた石碑を見て、唐王は入りたくないと拒む。功徳司はまだ確定したわけではなく、人間界に戻れるかも知れないのだからと宥める。唐王は崔判に会って全てを話したいと言う。功徳司は唐王をまず十殿冥王の崔判の所へ連れていく。崔判は、龍王が唐王の不実を閻君に訴えたので、唐王に陰府に来てもらい話を聞くことになったと言いつつ、唐王を迎えに出る。唐王は崔判に魏徴の手紙を渡す。

③ 功徳司は崔判に後を頼んで去る。

④ 崔判は唐王を公館に案内し、自分は閻君に唐王到着の報告をしに行く。

「入公館」

① 閻君に呼ばれて参上した唐王は、十七歳で義軍を起こし、二十四歳まで多くの敵を倒したが、それは全て父の指図に従ったまでのこと、天下を安定させるため日も夜も惜しんで尽くしてきたのに、幼子と妻を残して突然命を絶たれたと嘆く。

② 閻君は龍王の訴えを唐王に伝え、「明日十殿冥王に森羅殿に案内させる。そこで裁判を行う。自ずと事は明らかになるだろうからしばし我慢を」と

唐王の死去を告げ、魏徴は上手に、尉遲恭は下手に退場。

「陰司界」

② 功徳司下手より登場。白馬を牽く紅鬼、馬上に唐王、後ろに涼傘を持つ白鬼の順で下手より登場。全員上手に退場。二度繰り返し。三度目に下手より登場した際、上手側に石碑の作り物。唐王馬から下り。紅鬼、馬、白鬼下手に退場。二人上手に退場、下手より再登場。三度繰り返す。

③ 崔珏（生／雑）上手より登場、名乗り後下手に退場。唐王、功徳司の順で下手より登場、上手に退場。上手側に机（小）下手より唐王、功徳司、上手より崔判同時に登場。崔跪く。唐王は袖から魏徴の手紙を崔に渡す（手紙は作り物使わず）

④ 功徳司下手に退場。

「入公館」

① 舞台中央に机（小）牛頭（牛頭／雑）馬面（馬面／雑）宙を浮き下手より登場。互いに拝礼後、舞台端上手側に牛頭、下手側に馬面を掛ける。閻君（北／北）下手より登場。崔下手より登場、跪き報告後下手に退場。唐王唱しつつ下手より登場。閻君に拝礼後下手側の椅子に座る。

② 唐王下手に退場。

③ 言つて、旅の埃を払うための宴を開く。
 ③ そして下役に、明日森羅殿に赴き裁判に同席する
 よう指示した文書を十殿冥王に届けさせる。

○第四套「遊地府」

「改簿」

① 崔判は魏徴の手紙を読み、唐王を助けてやりたい
 と思うが、まず生死簿を確認しようと思ひ立つ。

② 生死簿の一号は龍王で寿命三十五歳、二号は人王
 で同じく三十五歳とあるのに驚く。崔判は唐王の
 寿命の三に二本加えて五にし、五十五歳にしよう
 とするが、もし露見したら、或いは龍王に寿命の
 差を詰問されたらと悩む。龍王は海国の主、人王
 は天地人から考えれば龍王とは寿命が異なるとい
 う言い訳を考え付いた崔判は、無実の人を殺して
 はならぬと生死簿の改竄を決意する。また唐王を
 人間界に返し、その妹を陰府に入れて龍王と結婚
 させ龍王の怒りを解こうと決める。そして改竄が
 露見したらと躊躇する気持ちを励まし、魏徴との
 友情を優先して実行する。ちょうどその時文書を
 届けにやつて来た閻君の使者が到着する。

「会審」

① 森羅殿の裁判が始まる。閻君は龍王の訴状を読み
 上げ、龍王と唐王を呼び出す。

③ 下役は登場せず。閻君上手に退場。牛頭馬面互
 に拝礼後牛頭は上手に、馬面は下手に退場。

○第四套「遊地府」

「改簿」

① 舞台中央に机（小）、机上には文房四宝の作り物
 崔下手より登場、机の後ろに座す。手紙は作り物
 用いず。

② 生死簿は作り物用いず、仕草で頁をめくる表現。
 立ち上がり上手下手へと移動、倒れるなどで驚き
 を表現。筆（作り物）を手にとり改竄後、筆を机
 上に戻す。下手に退場。

「会審」

① 上手下手に机（小）各一、中央に文房四宝の作り
 物を置いた机（大）。屏の上を越えて下手より白
 鬼、青鬼、黄鬼、紅鬼（鬼臉／雑）登場舞台端下
 手側に白鬼と青鬼、上手側に黄鬼と紅鬼を掛ける
 牛頭馬面屏の上から登場、互いに拝礼後牛頭は舞

- ② 龍王は唐王を見るやいなや怒って刀を振り回し、唐王は怯える。閻君はひとまず唐王を下がらせ、龍王の訴えを聞く。
- ③ 龍王を下がらせ唐王を召し、事情を聞く。閻君は唐王の話から、唐王は無下に龍王を殺したのではなく天誅であり、唐王を人間界に帰らせるべきと判断する。
- ④ 二人の間で話をつけさせようと龍王も呼び出す。閻君は天誅で死んだのだと言うが、龍王は聞き入れない。結局二人とも天命に従うこととなり、閻君は崔判に生死簿を持って来させる。
- ⑤ 龍王は自分と唐王の寿命が違ふのを知り、同じ生年月日なのにおかしいと不服を訴える。崔判はかねて用意していた二人の寿命差の説明をし、唐王の妹を龍王に嫁がせる案を奏上する。閻君はこの案を採用する。そして唐王に人間界に戻る前に地府見物を勧める。
- ⑥ これを聞いて龍王は、唐王が帝位につくまでに唐王の命を狙わせた者達に、地獄の各殿で唐王の命を殺す事にする。龍王の心知らぬ閻君は、青衣童子に唐王を地府見物に案内するよう命じて裁判を終わらせる。
- ⑦ 唐王は還陽後、お礼に瓜果を届けますと言って地府見物に向かう。

- 台端上手側、馬面は下手側に掛ける。崔下手より業鏡（生／生）上手より登場。崔は下手の、業は上手の机に座す。二人の冥王（十人を表現）上手（北／北）と下手（生／雄）より一人ずつ登場、中央の机両脇に座す。閻君上手より登場。
- ② 龍王下手より登場。唐王上手より登場。唐王上手に退場。龍王下手に退場。
- ③ 唐王上手より登場。
- ④ 龍王下手より登場。崔は生死簿を、机上に置く仕草。閻君それをめくる仕草。
- ⑤ 龍王閻君の側に駆け寄り生死簿を覗き込む仕草。崔は上手側に跪き、寿命差を説明。
- ⑥ 龍王下手に退場。青衣童子は登場せず。唐王上手に退場。閻君左右の冥王、上手下手に一人ずつ退場。閻君上手より退場。崔、業互いに拝礼後、崔は上手に、業は下手に退場。牛頭、馬面互いに拝礼後牛頭は上手に馬面は下手に退場。白鬼、青鬼、黄鬼、紅鬼互いに拝礼後下手に白鬼と青鬼、上手に黄鬼と紅鬼退場。

「地府」

① 青衣童子、唐王、崔判の三人は地獄見物に出かける。

② 初めに着いたのは刀山地獄。崔判は中に入ろうとする唐王を制止し、罪人を一人中から呼び出す。出てきたのは唐王の兄、建成。

③ 建成は帝位を奪った弟を恨んで殺そうとするが、唐王は兄自ら帝位を譲ってくれたのではないかと建成を宥める。崔判も骨肉の情を思うよう勧めるが、兄の恨みは消えない。崔判は建成が弟を羨んで殺そうとしたので、逆に唐王側の者に殺されたのであって、唐王のせいではないと諭す。それでも折れぬ建成に、崔判は唐王に対し、人間界に戻り次第水陸道場で兄の超度をし、地獄の責苦から兄を救えと勧める。

④ 兄弟は和解する。兄は唐王に龍王との経緯を尋ねる。唐王は無事に人間界に帰れると言う。二人は必ず超度をする約束して別れる。

⑤ 次に着いたのは春碓（米をつく臼）地獄。ここでは尉遲恭に殺された唐王の弟、元吉が出てきて唐王を地獄の中に連れ込もうとするが崔判が制止する。

「地府」

① 青衣童子（生／生）下手より登場、名乗り後、唐王と崔下手より登場。青衣童子上手に退場。唐王崔上手に退場。下手から青衣童子、唐王、崔の順で登場。唐王舞台中央で唱しつゝ両袖を交互に巻き舞う。上手退場、下手登場を二度繰り返す。

② 上手側に城門の作り物。青衣童子、唐王、崔は下手より登場。崔が前に出て声をかけると城門が開く。建成（北／北）が斧を三本、三角形に組んだものを首に水平にかけて登場。

④ 建成城門に入る（上手に退場）唐王、崔、青衣童子
子の順で下手に退場。城門掃く。

⑤ 唐王、崔、青衣童子の順で上手より登場、下手に退場、上手より登場。下手に城門の作り物。崔が前に出て声をかけると城門が開く。青衣童子、舞台端下手側に掛ける。元吉（雑／雑）、下半身がなく布で包む。両手を使って出てくるとすぐに唐王に飛びつこうとする。唐王は崔の後ろに立つ（崔が体で防いだ形）

龍王と唐王の妹を結婚させる事等を話す。唐王は崔判の厚情に感謝する。
⑪ 崔判は唐王に早く人間界に戻るよう勧める。

「回陽」

① 魏徴と尉遲恭が、唐王が七月七日に冥界に召されてから七日たつのに何の知らせもないと心配していると、唐王が帰ってきたとの知らせ、急いで参上する。

② 唐王は冥界での出来事の内、妹の件以外を詳しく語り、諸臣は崔判に感謝する。唐王は約束した水陸道場の仕度と借金返済を諸臣に命じる。

○第五套「進瓜菓」

「劉全嘆」

① 劉全は自分の境遇を嘆き、誤解から妻を死なせた事、不思議な僧の事など今までの出来事を語る。唐王が冥界行から戻り、あの世へ謝礼を届ける使者を探す触書で、使者となった者には高官の地位と重い褒賞が与えられると知った劉全は、使者になればあの世で亡き妻にも会え、官位に就けば先祖に顔向けもできると思い、名乗り出る。

「折皇榜」

① 唐王は触書を出しても応じる者がいないと嘆いている。
② そこへ劉全がやってくる。早速使者に任命し六品

⑪ 唐王下手に退場。崔は舞台中央で上昇、屏の上を上半身だけ観客側に乗り出し退場。

「回陽」

① 舞台中央机（大）魏徴上手、尉遲恭下手より登場
唐王婦朝の知らせは声のみ。魏徴上手、尉遲恭下手に退場。

② 唐王両脇を魏徴、尉遲恭に支えられ下手より登場
（魏徴、唐王、尉遲恭の順）同じく支えられ上手より退場。

○第五套「進瓜菓」

「劉全嘆」

① 劉全下手より登場。下手に退場。

「折皇榜」

① 舞台中央に机（大）唐王下手から登場。
② 劉全下手より登場。下手側に跪く。御酒の件は台

- ⑥ 唐王は元吉に、齊王の位につけたのに満足せず、長兄と謀って自分を殺そうとし、尉遲恭が英雄であることを恐れ、ついには勝負をして素手の尉遲恭に負けて死んだのだから自業自得だと諭す。元吉は、尉遲恭のくせに尉遲恭に復讐するどころか却って尉遲恭の位を上げた、兄弟より他人を愛する奴と唐王を責め、曰で碾こうと思う。
- ⑦ 崔判は元吉に、次兄である唐王によって得た富貴で満足すべきだったのだ、唐王が人間界に戻って水陸道場をし、地獄の苦しみから救ってくれるのを待てと勧める。元吉は唐王に龍王との経緯を尋ね、無事落着いたのを知ると、妻の安否を尋ねる唐王は自分が世話をみており、苦勞はさせていないと言う。元吉は自分の超度を忘れぬよう頼む。
- ⑧ この先にはどんな地獄があるのかという唐王の質問に崔判は、火烘、水浸、雷霆、氷池、血湖、火坑の各地獄で、各々に唐王に恨みをもつ者がいて責苦にあっているから行かぬ方がよい、唐王は三万両の金を出し、それを自分が各地獄に持つていき、唐王の徳と称して餓鬼に施してきましよう」と提案する。唐王は一文も持つて来ないことを嘆く。崔判は河南府功德州の相良という者が銀三庫を冥界に送ってきいているのでそれを借りて人間界に戻ったら返せばよいと勧める。
- ⑨ そこで唐王は借用書を書き、崔判が保証人になって借金をする。
- ⑩ 唐王は自分が冥界に来て以降、人間界の者は皆平安か崔判に尋ね、妹の寿命が間もなく尽きることを知らされる。驚き嘆く唐王に崔判は、魏徴との友情のために生死簿を改竄した事、善後策として

- ⑦ 体が不自由で移動の遅い元吉に手伝ってやろうと唐王は元吉を城門の内へ蹴り入れる。唐王、崔、青衣童子の順で上手に退場。城門の作り物掃く。
- ⑧ 下手より青衣童子、崔、唐王登場。青衣童子のみ上手に退場。上手より再登場。唐王証文を書くために下手に退場。青衣童子、崔の命を受け地府巡りの終了を報告しに戻る（上手に退場）
- ⑨ 唐王下手より登場。借用証文（作り物用いず）を崔に渡す。
- ⑩ 改竄した話は舞台中央で唐王と崔が向かいあって寄り添い耳許で内緒話の様。

の官位を与え、陰府で崔判と約束した連絡方法を教えるとともに、十殿の各王に贈り物を届け崔判に厚く謝礼を述べるよう命じる。劉全は御酒を頂戴しつつ妻にも会えると喜ぶ。

「城隍廟」

① 城隍廟では城隍が、唐王の使者の到着を待っている。

② 当番の小鬼に使者をあの世に連れていく手配を言いつけ、下級役人（皂）に変身させる。

③ 劉全がやってきて、唐王に言われた通り蠟燭を灯し、香を焚き、文書を焼いて「進瓜菓」と三度叫び、あの世へのお迎えを待っている。

④ しかし何も起こらない。劉全が文句を言うところに出る。劉全はこれが小鬼とはつゆ知らず、皂も正体を明かさずに鬼の酒飲み友達から、地獄の曲がりくねった道を進むための扇をもらったと言ふ。

「凡皂引」

① 劉全は皂と二人で酒を飲み酔っ払って眠る（劉全死去）。皂はあの世へ行くために劉全を起こし、二人で地獄への道行（破銭山、枉死城、奈河橋）のか尋ねる。劉全は今までの経緯と使者になった

詞、唱詞にはあるが演技はなし。劉全下手に退場唐王上手に退場。

「城隍廟」

① 舞台中央に机（小）下級官二人下手より登場。互いに拝礼後舞台端上手側、下手側に一人ずつ（共に雑／雑）掛ける。文判（生／生）、武判（北／北）下手より宙を浮きつつ登場。舞台上を回転後着地。名乗り後、舞台端の文判は上手側、武判は下手側に各々下級官の内側に掛ける。城隍下手より登場。机の後ろに座す。

② 白鬼下手より登場。白鬼、命を受け下手に退場。

③ 劉全下手より登場。机上には何も無いが見立ててあの世へ行く手続き。城隍の座す机の下手側に跪き、迎えを乞う。

④ 白鬼の化身の皂（雑／雑）上手より唱しつつ扇子を持って登場。皂上手に退場。劉全も上手に退場。城隍に拝礼後文判上手に武判下手に退場。二人の下級官も拝礼後上手下手に一人ずつ退場。城隍下手に退場。

「凡皂引」

① 酒を酌み交わす様は屏の後ろで声のみで表現。皂が劉全を引っぱって下手から登場。劉全、皂にぶつかって二人倒れる。

② 二人下手に退場、上手より再登場。皂と劉全の滑稽な会話。下手に退場、上手より再登場。奈河橋

理由を語って聞かせる。

③ 尙は鬼卒との会話から自分が死んだことを知る。劉全は尙と鬼卒に遺体は城隍廟の寢殿に置いてあると教えると、劉全は生き返る時のために自分の遺体を守ってくれるよう頼む。

④ 劉全を迎えた崔判は、鬼卒に劉全の世話を言いつけ、閻君に唐王の使者到着を報告に行く。劉全は鬼卒に妻に会いたいと頼む。鬼卒は劉全の妻が死ぬまでの状況を聞いた後、まず公務を果たし、その後で閻君に頼んでみよと教える。ちょうどよい死者がいれば、劉の妻の魂をその屍に入れて、夫婦共に生き返る事ができるかも知れぬという鬼卒の言葉に、劉全は喜ぶ。

⑤ 閻君と諸臣が森羅殿に揃い、崔判が劉全を呼び出す。劉全は使者としての役目を果たした後、亡き妻に会いたいため使者になったと訴える。

⑥ 崔判の口添えもあり、閻君は劉全の願いを聞き入れ第三殿にいる何氏を森羅殿に呼び出す。夫婦は再会を喜びあう。

⑦ 劉全は妻に自分の誤りを認め、ただ再会のみを願う、再婚も養子をとることもせず、唐王の使者に

の作り物上手側に出す。尙が痰を吐き劉全滑る。③ 崔の命を受けた鬼卒上手より登場。下手より尙、劉全登場。鬼卒が尙に公文書を要求すると、腹の中だと言う。鬼卒と尙、腹をくつつけ公文書を腹の中に移す。尙下手に退場。劉全、鬼卒について上手に退場。

④ 舞台中央に机（小）崔下手より登場し、机の後ろに座す。鬼卒下手から登場、下手側に立ち劉全を呼び下手に退場。劉全下手より登場。鬼卒下手から登場。崔上手に退場。鬼卒、劉全下手に退場。

⑤ 舞台中央に机（小）牛頭馬面宙を浮き、跳ねながら下手より登場。互いに拝礼後、舞台端上手側に牛頭、下手側に馬面を掛ける。崔上手、業下手より登場。互いに拝礼後、舞台端上手側に崔、下手側に業を牛頭、馬面の内側に掛ける。（崔は奏す。劉全下手より登場。下手に退場し、再び登場（贈物を持ってきたことを表わす）、贈物（作り物を用いず）を机上に置く仕草。

⑥ 崔上手に退場、書類（作り物用いず）を持参、何氏の居所を奏上。鬼卒下手より登場、命を受け下手に退場。鬼卒上手より登場、何氏到着を報告、舞台上中央で跪いたまま抱き合う。

⑦ 閻君の下手側に劉全、上手側に何氏跪き、閻君に直訴。

なつて来たと話す。閻君と何氏は劉全の過ちを許す。閻君は何氏にはもとの場所へ、劉全には早く人間界に戻りたいと言ふ。劉全は閻君に夫婦共に人間界に帰りたいと直訴する。閻君は、何氏は死して三年、すでに遺体も腐敗し生き返るのは難しいと難色を示す。劉全は妻と一緒になければ戻らぬと言ひ張る。

⑧ 崔判は使者が戻らねば事情を知らぬ唐王は閻君を義のない者と思うだろうから、唐王の妹が明日午の刻に死んで冥界に來るので、その体に何氏の魂を入れ、夫婦共に人間界に帰らせるといふ解決案を奏上する。閻君もこれを聞き入れ、劉全夫婦は喜ぶ。閻君は崔判に唐王からの贈物を各殿の冥王に分けて贈るよう命じる。

○第六套「打鞦韆」

① 還庫銀
鄂国公（尉遲恭）が、唐王が地獄で借金した金を返しに河南の功德州に派遣されてくる。

② 功德州の州主である梁世賢が出迎え、用件を聞いてすぐに相良を探して参上させるよう部下に指示する。

⑧ 劉全上手に、何氏下手に同時に退場。閻君、崔に命じた後上手に退場。崔、業互いに拝礼し、崔上手、業下手に退場。牛頭、馬面互いに拝礼し牛頭上手、馬面下手に退場。

○第六套「打鞦韆」

① 還庫銀
舞台中央に机（小）梁州主（生／生）下手より登場。名乗り後下手に退場。兵卒（雜／雜）、涼傘軍（雜／雜）下手より登場。巡捕官（北／北）下手より登場上手に退場。兵卒、馬に乗った尉遲恭涼傘軍、輿に乗った（椅子に座らせ、その椅子を宙に浮かせて水平に移動）巡捕官下手より登場。上手に退場。下手より登場、上手に退場。下手より登場。中軍（生／生）も後について下手より登場。
② 州主上手より登場、上手に退場。兵卒、尉遲恭、涼傘持ち、巡捕官、中軍の順で下手登場、上手退場を二度繰り返す。舞台中央（大）と上手に机

①「打轆轤」

唐王の妹、郡主李玉英は十八歳で未婚。玉英は昨

⑤ 梁は水汲みに行こうとする相良を引き留め、屋敷で暮らすよう勧める。相良は老夫婦一緒に暮らしてきて離れたことがないから一人だけ残ることが出来ない。断わる。ひとまず帰宅して、翌日夫婦揃って来る事になる。梁は皆が相良のようであつたならと、相良夫婦と楽しく暮らすことにする。

③ 尉遲恭が梁に唐王と龍王の件と唐王が相良に借金した経緯を話していると、なぜ召されたのか分かる。ぬま水売りの相良が参上する。

④ 尉遲恭から三万両の金を返すと言われても当惑するばかりで受け取らない。梁が返す金を取りに金庫に行くと、唐王と崔の筆跡による証文が見つかる。相良は金がなくとも幸せだし、貧乏暮らしはさっぱりしていて良いと固辞するので、尉遲恭は相良が功德州で楽しく暮らせるようにと梁に頼み都へ報告しに戻る。

①「打轆轤」

舞台中央椅子一脚。玉英（旦／旦）下手より登場

⑤ 相良、州主の順で上手より退場。

（小）中軍上手より登場、巡捕官下手より登場。互いに拝礼。同時に下手より地保（雑／雑）（小）を持って登場、机ごと巡捕官にぶつかつてから定位置に置く。上手の机に中軍、下手の机に巡捕官座す。尉遲恭下手より登場、中央の机の後ろに座す。州主下手より登場、下手側に跪く。州主に呼ばれ地保上手より登場、命を受ける。尉遲恭中軍に同行するよう命じ、中軍。地保の順で上手に退場。

③ 中軍上手より登場。屏の後ろで地保と相良（雑／雑）の会話（声のみ）相良上手より登場。

④ 地保が相良のための椅子を持って上手より登場、上手に退場。相良、尉遲恭の上手側に座す。州主下手に退場、下手より再登場。証文（作り物用いず）を尉遲恭に渡す。中軍上手に、尉遲恭、巡捕官下手に退場。

晩見た不思議な夢が氣に掛かっている。それは一人の女性が自分の手をひき「あの世の魂とこの世の体を持つ者は稀なり、半世の夫婦は以前の縁を続ける」という詩を詠むもので、宮女達を召し夢の解釈をさせる。

② 宮女達が訳が分からず様々な解釈がでるが、老宮女が春の夢に意味などあろうかと、氣鬱を晴らすために花園に行ってみましようかと勧める。

③ 郡主は花の美しさに氣持ちが明るくなる。老宮女は轆轤（ぶらんこ）に乗りましようかと、まず自分から乗る。

④ 次に若い宮女が乗り漕いでいると、大風が吹いて轆轤も宮女達も飛ばされ、郡主は椅子から投げ出される。

⑤ 白鬼が玉英の魂を背負って飛び去り、紅鬼が何氏の魂を背負って飛んできて、玉英の体の中に入れて

団扇を持った老宮女（雜／北）、若い宮女（旦／旦）下手より登場（二人の宮女で多数を表現）。玉英、老宮女若い宮女の順で上手に退場、下手より登場。二度繰り返す。

② 三度目の下手からの登場は老宮女、玉英、若い宮女の順。上手に退場。

③ 下手より老宮女、若い宮女の順で登場、上手に退場。下手側、椅子に紐を付けたものを舞台枠につけ轆轤にする。上手側に机（大）に小の机をのせる。後ろ側にもう一つ机（小）を丁字型に置く（轆轤楼の見立て）屏側の脇に階段に見立てた椅子を置く。下手より玉英、若い宮女、老宮女の順で登場。若い宮女に助けられ、玉英は轆轤楼に登り座す。老宮女の遣い手は椅子の紐も持ち人形と一緒に揺らす。若い宮女、轆轤を押す様。

④ 若い宮女も同様にのる。のっている間に上手より紅鬼、顔を白布で覆った女性（何氏の魂）を背負い、宙を浮いて登場、玉英の背後の中空でしばし停止、上手に退場。大風は鑼鼓で表現。宮女達、飛ばされて倒れ、飛ぶように下手に退場。同時に机（小）が外され、玉英下まで落下。

⑤ 下手より赤布で顔を覆った女性を背負った白鬼が宙を飛んで登場、玉英の体は何度も背の女性を擦りつけるようにして下手から飛んで来て、舞台に倒れて置かれた玉英の体の上に何氏の体（顔の覆いなし）を何度も擦りつけ、最後は屏の下手側の幕

⑥ 宮女達は慌てて郡主を助け起こして宮中に運び込む。老宮女は唐王に報告しに行く。

「大結局」

① 尉遲恭が帰朝し、唐王に河南の相良の件を報告する。劉全も戻って、冥界での状況を詳しく報告する。唐王は褒美を与えるので下がって待つよう劉全に言う。

② そこへ老宮女が慌てて参上、郡主が怪我をした、至急医者の手配をと奏上する。玉英が「わが夫、劉全よ！」とうわ言を言う。驚いた唐王が玉英を側近くに運ばせると、玉英は、劉全が冥界で夫婦共に人間界に帰りたいと訴えたのを閻君が聞き入れたと話す。唐王は驚いく。劉全に聞けばよいという老宮女の案をいれ、劉全を召す。夫婦は再会を喜ぶ。唐王は劉全から事の仔細を聞き、冥界で聞いた崔氏の言葉と考え併せ、二人を結婚させる事にし、劉全を三品の大夫に叙す。(終)

を少し開け、そこを潜らせて何氏の人形退場。
⑥ 老宮女下手より登場。玉英を抱えて上手より退場

「大結局」

① 舞台中央に机(大)二人の太監下手より登場、互いに拝礼後、舞台端上手側下手側に一人ずつ掛ける。唐王下手より登場、机の後ろに座す。尉遲恭下手より登場。下手に退場。劉全下手より登場。下手に退場。

② 老宮女下手より登場。下手に退場。屏の後ろで看護する宮女達の声と玉英のうわ言。老宮女下手より登場。下手に退場。玉英下手より登場。劉全上手より登場。上手側の舞台端に掛けられた太監の後ろに隠れ、玉英の様子を伺う様。老宮女下手より登場、玉英を支えて下手に退場。劉全、唐王に召され、唐王の上手側へ。劉全上手に退場、三品の官衣に着替えて上手より登場。劉全上手に退場唐王下手に退場。太監互いに拝礼後、上手、下手にひとりずつ退場。(終)

『民俗曲藝叢書 目連資料編目概略』⁽⁶⁾

地方戯曲社、泉州木偶劇団編印の曲本の套・折名が記載されている。注5であげた沈氏の文章にも套・折名が紹介されており、実見記録との対照を付記する。

実見記録

第一套

「化金簪」
慶功臣
化金簪

第二套

「袁天罡」
漁樵会

回報
城隍奏
栽菜

議計
落雨

燒卦書

第三套

「斬龍王」

龍王嘆
囑国事
陰司界

目連資料編目概略

第一天上午（一日目午前）

「化金簪」

慶功臣

劉全別妻出外經紀

菩薩祖師化僧行

何氏行善化金簪

劉全疑妻何氏屈死

僧行怒責劉全白日昇天

第一天下午（一日目午後）

「漁樵会」、「燒卦書」

漁樵会

龜相回報

袁天罡栽菜

龍王賭賽

接玉旨降雨

龍王作弊犯玉旨

燒卦書

責龍王犯天條

第一天晚上（一日目夜）
「奕棋套」、「遊地府」

奕棋斬龍

龍王嘆

唐皇受驚囑託国事

功德司引唐皇入陰府

「目連傀儡」中の目連戲

第一天上午（一日目午前）

「化金簪」

第一天下午（一日目午後）

「漁樵会」

第一天晚上（一日目夜）
「奕棋套」

入公館

第四套

『遊地府』

改簿

會審

地府

回陽

第五套

『進瓜菓』

劉全嘆

折皇榜

城隍奏

凡皂引

第六套

『打鞦韆』

還庫銀

打鞦韆

大結局

入公館念閻君

崔判改簿

十王會審

賜遊地府

見建成元吉

借庫銀散給餓鬼

第二天上午（二日目午前）

『進瓜菓』

李世民回陽

劉全折榜

受旨進瓜菓

役差引劉全入陰府

第二天下午（二日目午後）

『還庫銀』、『打鞦韆』

進瓜菓有功賜夫妻回陽

尉遲恭奉旨還庫銀

打鞦韆・借屍還魂

見唐王訴冤情・賜婚封官

第一天晚上（一日目夜）

『遊地府』

第二天上午（二日目午前）

『進瓜菓』

第二天下午（二日目午後）

『打鞦韆』

三 「李世民遊地府」にみる演技演出

○曲調・唱腔

泉州提線木偶戲で用いる曲調・唱腔は、出自によって次のように分けられている。⁽⁷⁾

① 提線木偶戲独自のもの

嘮哩哩の三文字だけで唱される事が多い。請神、辞神で用いられる。

② 唐代大曲

襲用だが、これに該当する曲牌には研究者によって異同がある。

③ 宋詞、元明南曲北曲

④ 南音、梨園戲

これに提線木偶戲を加えた三種が共有する曲牌は、どれがオリジナルなのか確定されていない。

⑤ 仏曲

この分類では入れられていないが、道教音楽と共有するものも多い。

「李世民遊地府」で用いられている唱腔の曲牌全五十九種から、前記の分類の⑤仏曲と、道教音楽と共有するものに注目しその用い方についてみてみる。

・ 仏曲と共有のもの

抛盛

第一套「化金簪」迦菩提祖師、登場してすぐの唱

第四套「地府」崔珏、刀山地獄から舂碓地獄への道行の唱

元吉、登場してすぐの唱

北江児水 第一套「化金簪」迦菩提祖師の化身の僧、何氏の家に行くまでの道行の唱

第二套「栽菜」袁天罡、登場してすぐの唱

・道教音楽と共有のもの

北上小楼 第四套「地府」唐王、地獄巡りの開始、刀山地獄への道行の唱

望吾郷 第三套「陰司界」唐王、あの世への道行の唱

園林好 第一套「化金簪」迦菩提祖師の化身の僧、何氏の家を出て劉全と出会うまでの道行の唱

劉全、帰宅して最初に何氏を責める唱

何氏、右記の劉全の唱を受けての唱

一江風 第一套「化金簪」何氏、劉全が怒りつつ帰宅する直前、家で劉全を思いながらの唱

第三套「囑国事」唐王、登場してすぐの唱

唐王、右記の唱の後の白の後の唱

漿水令 第一套「化金簪」劉全、自宅で何氏を怒って責める際の唱

何氏、右記の劉全の唱を受けての唱

第五套「城隍廟」城隍、白鬼が拝命し退場したあとの唱

第六套「打韃靼」李玉英、花園での唱

提線木偶戲では、仏曲を仏教界の諸尊眷族や、仏教信者の唱、法事の場合での読経など仏教と関連のある場で用いる。

「李世民遊地府」では迦菩提祖師、その化身である僧、袁天罡が用いている。迦菩提祖師はどのような存在であるのか、はっきりしない。実見記録ではその職掌を、迦菩提祖師自身が白で述べているままに記した。八卦衣に松子という

出で立ちは、仏教系というより道教系を連想させる。しかしその化身が僧であること、この迦菩提祖師の計画を共有するものが他の登場人物にいないこと、また仏曲を用いていることを考え合わせると仏教系ではないかと思われるが、判断材料が乏しいので保留する。迦菩提祖師については是非ご教示賜わりたい。

袁天罡は袁天綱という実在の人物がモデルで、貞觀八（六三四）年太宗李世民に拜謁し、嬰兒の武則天の将来を的中させた著名な占卜家だが、「李世民遊地府」では市井の売卜先生として登場する。特に仏教との関連がある人物ではない。提線木偶戲の「目蓮救母」に比べると仏曲の用い方に幅があるのかもしれない。これについては、稿をあらためて取組みたい。

道教音楽と共有としてあげた曲牌を詳細にみると、望吾郷、一江風、漿水令は道教の法事で唱腔として用いる曲牌、北上小楼、園林好は楽曲として用いる曲牌（泉州地区の他の演劇でも常用）である。分類の項目立てに入っていないことから分かるように、提線木偶戲と道教のどちらがオリジナルかは研究者によって意見が一致しておらず、仏曲に比べてその用法に、道教と関連のある特殊な約束事はない。⁽⁸⁾

○屏の働き

・舞台空間を表わす

伝統的な提線木偶戲の舞台は前述した。実際の上演区域である舞台空間は、屏から前といわれているが、「慶功臣」の①のように人形を舞台端に掛ける事は多く、両端と客側の二本の柱をつないだ線内と考えてよさそうだ。遣い手は屏の後ろに並んで遣う。奥行きは舞台端から屏までの約五十センチで、遣い手の腕を伸ばしてカバーできる範囲である。しかし人形の動きは、屏に対して垂直方向より平行方向の方が圧倒的に多い。

屏より後方がいわゆる楽屋になる。出を待つ人形を掛け、使わぬ道具を置く。道具の中でも椅子は梁状にかけた竹竿

に掛ける。手すきの遣い手が人形の支度をしたり、他に場所がない場合は休憩する空間としても使われる。

・開演、終演を表わす

屏を台本を掛ける柱の位置よりやや奥側に置くことで、芝居が始まることを表わす。上演場所に舞台がない場合、まず舞台を作り、人形の準備をする。人形は舞台を組んだ柱の内、客側を除いた三方に掛ける。その時の演目によって用いる人形は異なるが、四美班時代に人形の掛ける位置は固定しており、これに準じる⁽⁹⁾。楽隊は舞台上手側。司鼓が舞台を見られさえすればよいという楽器配置のきまりは他の中国演劇と同様。

開演の際には起鼓で知らせる。開演時の請神である「大出蘇」⁽¹⁰⁾を最初に行い、次に演目を始める。大簿（一回の上演で終わらない長編物）の場合、各上演回の終了は屏を舞台口まで出すことで表わす。大簿すべてが終了した場合は最後に辞神（送神）を行って終了する。これは泉州提線木偶戲の伝統的な上演方法だが、請神・辞神は一般公演などでは省略されることも多い。

・屏を使う演出

一つは登退場がある（後述）他に「李世民遊地府」では「打韃靼」⑤の何氏の体を屏の幕を潜らせて退場させる演出がある。この場合何氏の体は、何氏の魂を表現する。従って魂を玉英の体に入れてしまった後、何氏の体は存在の実体を失う。このように退場させることで、実体を失うと同時に客の目から消してしまう演出と思われる。これも屏の前方だけが芝居の世界という観念が確固としている証の一つだろう。

○登退場の約束

筆者は八四年から数年間、中国の「戯曲」全劇種をその性質から三大分類にした場合、各々代表的な劇種である京劇、昆曲、川劇を対象に、下手と上手との表わす意味について調べた。その結果、下手への退場は舞台上で展開してい

る世界を外れることを意味し、上手への退場はまだその世界に留まっていることを意味する傾向のあることが分かった。登場も同様で、これから考えると下手の奥にひろがる世界と舞台の上の世界は隔絶しているが、上手の奥にひろがる世界と舞台の上の世界は連続していると言えそうである。この約束に縛られないことがあるのは、丑行の扮する人物と神仙であった。これは人による人戯の場合である。木偶戲ではどうだろうか。「李世民遊地府」にみる人形の退場では、実見記録の「化金簪」⑦⑧の何氏の動き、「還庫金」②の梁州主の動きのように、こうした傾向は絶対的なものではないことが伺える。実演の舞台は空間が人形にとっては十分でも、遣い手である人間にとってはかなり狭い空間であることも関連するだろう。

人形ならではの約束は、神仙の登退場にみられる。神仙は宙を浮いて登場し、舞台に出てから着地する。また或いは屏を越えて上から登場する。上から登場するのは、鬼卒など身分の低いものは行わない。退場も同様だが、屏を越えて上から登場したものは、屏を越えたあと上半身を屏の上から客側にのりだしてから退場する。この宙に浮くという登場場は、客と演者との間の約束を越え、舞台上の世界でも機能している。例えば「化金簪」⑧⑨で、何氏が自殺した後も怒りの消えぬ劉全は人の言うことに聞く耳持たぬ状態だが、僧が屏の上を越えて退場するのを見て、初めてそれが人ではないこと、そして自分の誤りに気付くのである。

○空間の移動

場面が転換する空間移動は人形が下手或いは上手に退場し、舞台上の道具を変えることで表現されるが、「化金簪」⑥⑪、「漁樵会」①、「陰司界」②、「地府」①など、いわゆる道行で、舞台上の時間を継続させたまま他の空間に移る場合は、唱しつ（唱が終わると楽曲のみ継続）行うという固有の表現形式がみられる。これは屏の後方は舞台上の世界ではないという観念と、また前述したように人戯と異なり上手下手の奥と舞台上の世界の関係が固定していないこと

に関連する演出かと思われる。人形が一度退場し、再び登場するまでの、屏の後にいる時間も舞台上の世界の時間が継続していることを表すために、視覚的には消えても聴覚的に継続させるのではないか。またこの演出では、上手退場下手登場或いはその逆を二度繰り返し、三度目に次の展開に移る形が多い。

○視覚的表現

泉州木偶劇団が七十年代に創造した天橋式舞台（櫓を高く組み、人形を額縁舞台の中で扱う。遣い手は額縁舞台の上におり、客からは見えない。また糸が非常に長くなり、操作も難しい）による「三総合」形式（提線木偶戯と掌中戯一指遣い人形、杖頭木偶、棒遣い人形、これに仮面をつけた人間を加えて一つの作品を作る）が国内外で高い評価を受けてから、視覚的表現は人形に集中してきた。また近年人形や頭の改造によって、表現力が大幅に増強された。⁽¹⁾しかし伝統的な提線木偶戯では、人形だけでなく遣い手を見ることもその対象だったという（九二年八月楊度氏談）。そこで視覚的表現を人形と遣い手に分けて考えてみたい。

人形の表現は糸の操作で行う。これを線功と呼ぶ。伝統的な技としては歩く、座るといった体全体の動き、「抜劍挿劍」（鞘から劍を抜き、戻す）、「磨墨」といった手を主として体を連動させる動きがある。これには作り物を使う技と使わない技とがある。「李世民遊地府」で見ると、作り物を使う技としては「化金簪」⑮の傘、「改簿」②の筆がある。また作り物を使わず、仕草と言葉で見せる技としては「化金簪」⑨の簪、「漁樵会」③の魚、「斬龍王」②の贈物、③の碁盤、「囑国事」②、「陰司界」③の手紙、「改簿」②、「会審」④の生死簿、「地府」⑨の借用証文、「城隍廟」③の香炉一式、「凡自引」⑤の贈物、⑥の書類がある。「還庫金」の輿、「打鞭鞭」の鞭鞭は椅子に人形を座らせ、椅子と人形を一つとしてどのように遣うかで状況を表現しているので演技というより演出の技というべきだろう。

楊度氏は人形を手にしたら遣い手は、唱や白などすべてを瀟過して一気に滞ることなく「純木偶表演」をしなければ

ならないと述べた。⁽¹²⁾ 人形と遣い手の一体化である。その遣い手の視覚的表現には顔の表情、体の動きがある。例えば後述する聴覚的表現に関連するが、「化金簪」の⑫、「漁樵会」の②、「凡良引」①②③④のように、言葉による滑稽なやりとりが中心で人形の動きがあまりない部分では、遣い手同士も顔を見合って、表情豊かに演じるのである。舞台には顔を覆う被があるが、舞台上に近ければ客のいる位置と舞台の位置の高さに差があるので、遣い手の表情は十分に見える。この顔を覆う被は、遣い手の顔を覆うというよりも、梁状にめぐらした竹竿に掛けた人形の顔を隠すためではなからうか（掛けた人形に関する約束には、その足が遣い手の頭より上にあってはならないというものがある）。八〇年代中葉以降創造された、一人の出遣いでひとまとまりの話、或いは場を演じる形の一連の作品では、遣い手は顔を隠さない。これも遣い手の顔が見えることはタブーではないという意識があるからではないだろうか。

体の動きには「李世民遊地府」では「城隍奏」の①、玉靈官の一〇八巡がある。九五年二月に実見した際には実は四巡しかできなかった（楊度氏は「技のある者は体力がなく、体力のある者は技が及ばない」といたく不機嫌だった）。他にも例えば「目蓮救母」では、遣い手の足に人形を乗せて船を表わすなどの技もある。

○聴覚的表現

提線木偶戲では後継者を養成するために選ぶ際、記憶力、手指の器用さ、声の三つをみる。提線木偶戲の演技は遣い手の線功と声によって行われる。前述したように提線木偶戲の魅力としては、近年視覚的表現が中心になっているが、本来は聴覚的表現も同等、或いはそれ以上に重要だったという（九五年二月王景賢泉州木偶劇団団長談）。唱の要求は音調が正確で、発音が正確明瞭であることが基本で、これに喉の良さが加わるのを良しとする。白の要求は、役柄分類により異なるが共通するのは発音が正確明瞭なことだ。提線木偶戲の聴覚的要素を考える場合、唱と白という捉え方だけでは不足である。というのも、提線木偶戲の脚本は、それに書かれた必ず言う或いは唱する言葉と、「亥」（「自意

咳」と表記された遣い手が自由に話す部分とで出来ているからだ。この部分は話す内容も、時間も何ら制限がなく、遣い手の力量を発揮する場になっており、聞かせ所になっている。「亥」ほどの役柄分類にもあり、「李世民遊地府」では「慶功臣」の唐王、「化金簪」の僧、何氏、劉全など全編にみられる。

四 「李世民遊地府」の構成

「李世民遊地府」の内容は、魏徵斬龍・唐太宗入冥譚と劉全進瓜・何氏の借屍還魂の話で構成されている。この題材は『西遊真詮』第十〜十二回（世徳堂本『西遊記』第九〜十一回）と共通する。しかし西遊記の祖型は般若心経と観音菩薩で構成されており、本来唐太宗入冥譚と西天取経故事は無関係だったという。⁽¹³⁾唐太宗入冥譚は唐代にすでに現れている。⁽¹⁴⁾魏徵が龍を斬った故事は元の初め頃には成立していたと推定されているが、元代の西遊記にこの故事が入っていたかどうかは分かっていない。元明の間と推定される『永樂大典』（永樂六年、一四〇八年）卷一三三九に引用された話本西遊記⁽¹⁶⁾には魏徵斬龍故事が入っている。

明代になると複数の異本が生まれる。現存するものの内、内容が最も完備しているという世徳堂本では魏徵斬龍・唐太宗入冥譚と劉全進瓜・劉全の妻、李翠蓮の借屍還魂が結びついており、⁽¹⁷⁾清刊本西遊記でも受け継がれている。紙幅の関係で、その内容は「李世民遊地府」の特性を述べる際に触れることにし、ここでの概述は割愛する。

○登場人物の設定にみる特性（西遊記は『西遊真詮』に拠った）

魏徵斬龍・唐太宗入冥譚関係

唐太宗…西遊記では、龍王との約束を守れなかったことを悔いながらも、処刑された龍王の頭を晒首にして長安庶民

の戒めとし、魏徵に対してはこのような豪傑がいれば国家安泰と賞を与えるなど、帝王らしい対処をするが、泉州提線木偶戲の「李世民遊地府」（以下本劇と略称）では、龍王との約束を破ったことを恐れ、魏徵、尉遲恭とともにその頭に三拝して許しを請い、丁重に葬る。また「地府」では元吉が説得されて帰るところを手伝ってやろうと城内に蹴り入れるなど、帝王らしいというよりは、等身大の人間臭さが強く出されている。

魏徵と尉遲恭…西遊記は徐茂功（世徳堂本は徐世勣）初め多くの文武官が登場するが、本劇では遣い手が五、六人と制限があるため、唐太宗の重臣は魏徵と尉遲恭の二人だけで代表される。従って西遊記にある門神の由来たる話は省略されている。

龍王…やや短慮で恨み深い所は西遊記と共通だが、唐太宗と生年月日が同じで、三十五歳というのが加わった。

龜相…西遊記では漁翁と樵子の会話を巡水夜叉が聞いて龍王に報告、また龍王に玉帝の指示を違えて降雨する案を奏上するのは他の水族だが、本劇ではこの木樵（樵子）、巡水夜叉、策の奏上者の三役を龜相一人で担う。勿論遣い手の人数という制限もあるのだが、特に木樵と巡水夜叉を一人にした点は注目される。

漁夫…西遊記では樵子共々科挙を受けぬ進士として描かれるが、本劇では好々爺として描かれ滑稽味が加えられている。

袁天罡…西遊記では袁守誠（袁天罡の叔父）

相良…河南功德州の水汲み。西遊記では河南開封の人。職業は特定していない。本劇では相良の人柄、生活が具体的に描かれている。

梁州主とその家臣…太宗の借金返済を描くために必要というだけなので没個性。

劉全進瓜・何翠蓮の借屍還魂譚関係

劉全…西遊記では均州の金持ちで妻との間に二人の子がいるが、本劇では長安の貧乏書生で子もない。妻が自害

して三年、再婚せず養子もとらず、進瓜使になったのは自分の非を悔い、妻に会いたい気持ちと官職について先祖に顔向けしたため。西遊記の劉全と同じく直情の性だが、設定がより庶民的で人間臭くなっている。

何翠蓮…西遊記では李翠蓮

迦菩提祖師…劉全と何氏の運命を予告し、実行する。西遊記にはいない。

僧…劉全と何氏の運命を変える僧を迦菩提祖師の化身とすることで、人間界を超えた力によって変えられたことが明確になる。

女吊死鬼…何氏を縊死に導く存在。迦菩提祖師の計画で何氏は必ず死なねばならないことを示唆。

太宗妹玉英…夢で自分の未来の暗示を受ける。西遊記では何氏還魂の体としての存在だが、本劇では太宗に対する龍王の怒りを解くために嫁ぐという役回りを与えられる。

共通

崔珏…西遊記と同じく能吏だが、本劇では唐太宗の寿命を延ばすことだけではなく、龍王との寿命差の説明（龍王と唐太宗を同じ生年月日にしたために派生）、太宗の妹を龍王に嫁がせて怒りを解く案を考えだし、閻君に對し、太宗に結び付けて劉全夫妻を還陽させる必要を説き、何氏の還魂のための体に太宗の妹玉英を奏上するなど、西遊記より更にその有能さが際立つ。

閻君…崔が際立った能吏として描かれたため、その献策をいれるばかりとなり、西遊記より影が薄くなった。

○構成上の特性

第一套『化金簪』では最初に「慶功臣」で唐太宗が登場するが、これは提線木偶戲の約束である「頭出生」（最初に登場するのは生）ゆえで、まだ魏徵斬龍・唐太宗入冥譚の話の幕開けではない。続けて「化金簪」で劉全・何氏を出

す。第二套、第四套までは魏徵斬龍・唐太宗入冥譚、第五が劉全進瓜・劉全の妻何翠蓮の借屍還魂譚、第六套が唐太宗入冥譚の「還庫金」と何翠蓮の借屍還魂譚になっている。一見二つの故事は分割されているようだが、第一套で二つの故事の中心人物が登場し、続く「化金簪」で登場した迦菩提祖師が、仲睦まじい劉全とその妻の将来を決め、僧に變じて何氏に簪を喜捨させ、劉全に懷疑心を抱かせる。そして何氏自害後、劉全に自分の正体を悟らせることで、劉全進瓜・何氏借屍還魂譚の準備が整ってしまう。すなわち運命を決めたものが、そのシナリオに向かって動きを起こさせる形になっており、ここでは魏徵斬龍・唐太宗入冥譚は劉全進瓜・何氏借屍還魂を完結させるために使われている。こうして僧を迦菩提祖師の化身としたために、二つの故事は一つの大きな枠を共有することになった。西遊記では唐太宗が玄奘に西天取經を命じたことになっており、ゆえに太宗に関するこの入冥譚が加えられたと考えられている。¹⁸従って魏徵斬龍・唐太宗入冥譚の方が主で、劉全進瓜・劉の妻の借屍還魂譚はそれによって導き出されたものにすぎない。ならば僧を迦菩提祖師の化身とした本劇は、西遊記の世界から離れる方向にも働いていると言えよう。

また「漁樵会」の木樵を亀相の化身とすることにより、漁夫との会話を河辺から山中で行ったという設定に変更を可能にし、袁天罡の超人的な能力をその登場前から感得させ得るようになった。

龍王と唐太宗の生年月日を同じにした点と太宗の妹玉英を龍王に嫁がせる点には同じ志向が感じられる。このようにすると舞台の外の観念からいえば不合理なことでも、舞台の上ではきちんと辻褄が合う。前者は、龍王を処刑する魏徵が宰相とはいえ、人王である太宗が、玉帝の命に背いて龍王を助ける不自然さに、後者は太宗の妹の急死に合理性を与えられるのである。それによって筋の展開、登場人物の運命の展開が舞台上の世界だけで収束できている。本劇だけで完結しているので、この点でも西遊記という大きな世界を意識させる必要がなかったと思われる。

魏徵斬龍・唐太宗入冥譚と劉全進瓜・劉全妻の借屍還魂譚は、西遊記に取り入れられてから広く普及したという。¹⁹その表現形態も、読み物としての小説ばかりでなく元雜劇、明の隊戲、²⁰伝奇、戯曲、宝卷、鼓詞など様々な形を取っている。

ここでは、泉州と同じ福建省の莆仙戯、閩劇、薊劇の目連戯の内、魏徴斬龍・唐太宗入冥譚、劉全進瓜・劉全妻の借屍還魂譚関連のものを『民俗曲藝叢書 目連資料編目概略』から挙げる。この三種はすべて人戯であり、泉州提線木偶戯と同源で同年代に伝来したとされる莆田提線木偶戯のものは未見である。しかし容世誠先生が行った、シンガポールに渡った興化人による提線木偶戯の調査によると目連戯にこの関連のものは含まれていない。

・莆仙戯 莆田、仙游を中心とする興化方言地区⁽²²⁾／興化戯・宋代に温州雜劇が流入、元末明初に南戯の影響を受け形成莆仙戯の目連戯を構成する演目としては『鐘馗斬狐』(小戯)、『唐三蔵取経』(本戯・十齣)、『唐太宗遊地府』(本戯・七齣)、『劉全進瓜』(本戯・六齣)『黄巢』(二本・十二齣)、『観音掃殿』(一齣)『尼姑下山』(小戯・四齣)、『王魁与桂英』(本戯)、『滑油山』(折戯)、『魏徴斬蛟龍』(本戯・五齣)、『目連』(上部『傳天斗』四本三十六齣、下部『目蓮救母』七十七齣本、五十九齣本)、『目連聯台莆仙戯』(六本)、莆田『目連救母』が挙げられている。

『唐太宗遊地府』

東海龍王は人に変じて袁の所へ行き、いつ雨が降るかで賭けをして、わざと聖旨を違えて雨を降らす。龍王は天津を犯したので、玉帝は魏徴に龍王を斬るよう命じ、龍王は唐太宗に救いを求める。太宗は龍王を救うため、処刑の時刻に魏徴を召し、宮中で碁を打つが、魏徴は夢の中で龍王を処刑する。龍王は閻君に訴え、閻君は翌日太宗に、審問のため陰府に赴くよう命じる。太宗は陰府に来ると、助けたかったが魏徴は夢の中で処刑してしまった、定められた天数は逃れ難いと述べる。太宗を地府巡りさせ輪廻を見せた後、判官に命じて還陽させる。道中建成や元吉など多くの鬼魂に会い、判官は太宗に代わって銀を施し、道を譲らせる。太宗は還陽後玄奘に命じて超度を行い、尉遲恭は銀を返しに陰府に赴く。

『劉全進瓜』

劉全が妻李翠金を置いて蘇州に借金の返済を請求しに行ったときに、蕭打蘭は劉宅に盗みに入ろうとする。劉全は雨

のために戻ってくる。夜、溝に落ちた尼姑が翠金に服を借りようと劉宅に入る。打蘭はそれを見て、翠金が男の和尚と姦通したと思い込み、劉全に暴露する。劉全は帰宅すると刀を手に妻を殺そうとする。翠金は実家に逃げ帰り、兄は翠金を庵に入れて尼にする。劉全は翠金を探し出し、翠金は吐血して死ぬ。服を借りた尼が劉宅に返しに来て、劉全は初めて真相を知り後悔する、突然雷鳴と稲妻が起り、打蘭は雷に当たって死に、劉全は自殺しようと思う。朝廷が陰府への進瓜使を募るといふ触れ書きを出したので、劉全はこれに応じ自害する。閻羅は劉の事を知り、夫婦共に還陽させる。翠金は公主の遺体を借りて還魂、二人は新婚のように仲良く暮らした。

『魏徵斬蛟龍』

三年続きの早魃、唐太宗は尉遲恭と魏徵に祈雨を命じる。金毛龍は五湖の鎮守で降雨を司る。ある日漁翁が庸守臣の占卜は靈驗があると言うのを聞くが龍王は信じず、人に変じていつ雨が降るか占ってもらいに行く。庸が明日午刻に降ると言うので首を賭ける。龍王が戻ると明日午刻に雨を降らせという聖旨が届く。龍王は賭けに負けて首を取られるのを恐れ、故意に命と違え時刻を遅らせて雨を降らすと水深が七尺になった。玉帝は魏徵に翌日の午刻に龍王を斬るよう命じる。龍王は庸に助けを求め、庸は唐太宗に頼めと教える。龍王は珠金を贈って太宗に命乞いをし、太宗は承諾して翌日魏徵を召して碁を打つ。魏徵はついに斬刑の時を誤り、龍王は死を免れる。

・閩劇 福州を中心とする福州方言地区／福州戯・約三百年前に当地の戯曲が弋陽腔、徽調などを吸収して形成

閩劇の目蓮戯を構成する演目として『僧尼判』（小戯）、『岳飛刺青』（一齣）『夢斬涇河龍』（本戯：別名『劉全進瓜』・全三十二場）、『目蓮救母』（傀儡戯・二十一齣）が挙げられている。

『夢斬涇河龍』

涇河龍王は袁術士と賭けをし、故意に聖旨を違え降雨時刻を遅らせ天律を犯したので、玉帝は魏徵に翌午時に龍王を斬刑に処すよう命じる。龍王は唐太宗に助けを求め、太宗は魏徵を召し碁を打って龍王を助けようとする。魏徵は碁を

打ちながらうたた寝し、夢の中で龍王を処刑する。龍王は太宗の命を奪おうとし、太宗は病気になる。龍王は太宗を閻君に訴え、太宗は地府に召されて審問される。判官の崔珏は太宗の寿命を二十年増やし、太宗は人間界に帰ろうとする。去り際、閻君に欲しいものを尋ねると南瓜が欲しいと答える。太宗は還陽後、進瓜使を募る。

劉全は妻が僧に金の簪を喜捨したのを不貞と責めたので、妻李翠蓮は自ら縊死してしまい、後悔する。劉全は妻に会いたいと進瓜使に応募する。閻君が調べると、劉全も妻もまだ寿命が尽きていなかったので二人とも人間界に帰らせようとするが、翠蓮の遺体はすでに腐敗していたので、急死した太宗の妹の体を借りて翠蓮の魂を入れ、還陽させる。太宗は妹と劉全を結婚させ、夫婦は団円となった。

・薊劇 漳州、薊江一帯／台湾の歌仔戲と当地のもの、京劇など他地域のものが一体となって形成。台湾の歌仔戲が入った最初は一九二八年

薊劇の目蓮戲を構成する演目は『魏徵斬龍王』（本戯・十二場）、『蜜蜂記』（本戯・二十一場）が挙げられている。

『魏徵斬龍王』
東海龍王は六條を犯したので、玉帝は唐の宰相魏徵に龍王を斬るよう命じる。龍王が鬼谷に救いを求めると、唐太宗に頼めと教えられる。そこで龍王は宝珠を用意して太宗に頼み、太宗は承諾する。翌日太宗は龍王を救うため、魏徵を召して碁を打つ。魏徵は机に伏して寝てしまい、その魂が龍王を処刑する。太宗は驚愕し、病気になる。龍王は陰司に太宗を訴える。閻王は太宗を召し問いたです。判官は魏徵の頼みで密かに太宗の寿命を延ばす。閻王は太宗の寿命がまだ尽きていないのを知って無罪にし、地府巡りをさせた後、還陽させる。

莆仙戲の『唐太宗遊地府』、閩劇の『夢斬涇河龍』、薊劇の『魏徵斬龍王』は登場者名に異同はあるものの、西遊記に

ほぼ則している。しかし莆仙戲の『劉全進瓜』では劉全夫婦と僧の三人から蕭打蘭が加わって四人になり、李翠金が簪を喜捨するのではなく、尼に服を貸したのを蕭打蘭が誤解したことから筋が展開し、翠金が実家に戻ってから庵に入て尼になる、劉全の執拗さなど、西遊記からはかなり離れた脚色で、「翠蓮宝卷」⁽²³⁾の方向に近い。また『魏徵斬蛟龍』では龍王が死を免れるので太宗も人冥せず、進瓜使も必要がない。

人戲と木偶戲の差はあるが、目蓮戲という上演の目的や期日のはっきりしたひとまとまりの枠の中で、同じ題材を扱ってもこれだけ脚色に幅がある。故事の骨格さえ踏襲されればその故事の名を冠することができ、登場人物の氏名、登場人物同士の関係、筋を展開させる力やきっかけには自由な脚色が許されているのだろう。しかし泉州提線木偶戲の「李世民遊地府」のように、二つの故事を一つの枠に入れてしまう方向のものがない。

おわりに

なぜ泉州提線木偶戲の「目蓮戲」は「目蓮救母」の前に「李世民遊地府」と「三蔵取経」を加えたのか。沈継生氏は前出「目連傀儡」中「目連戲」の中で、「李世民遊地府」は老芸人の話によると「目蓮救母」と同じく冥間戲であり、また提線木偶戲の「頭出生」（最初に登場するのは生）という約束にかなない、しかもそれが皇帝ならその芝居が「正劇」であることを示すので最もよい。更に「三蔵取経」は「目蓮救母」と同じく仏教関係のもので、「目蓮救母」では観音が重要な位置を占め、「三蔵取経」では最初に登場するのが観音であるとする。沈氏の記した「老芸人」がいつ頃のどなたなのか明記されておらず、他にこの方面の資料もない。泉州提線木偶戲の「目蓮戲」には分らないことが多い。例えばこの演目が加わったのは清道光年間以降という時期ははっきりしているが、どこからどのように出来たものかは謎のままである。継続して「目蓮救母」、「三蔵取経」と取り組み、この謎を追いかけてみたい。

注

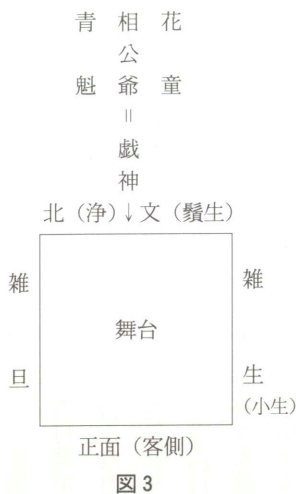
- (1) 「泉州提線木偶的伝人和発展」陳德馨『泉州木偶芸術』鷺江出版社 八六年
- (2) 宋・西湖老人『繁勝録』『福建戲史録』福建省戲曲研究所編福建人民出版社 八三年
- (3) 「名揚中外的泉州提線木偶戲」陳德馨『泉州文史資料』第十四輯
- (4) 沈繼生「目連傀儡」中的目連戲『泉州木偶芸術』鷺江出版社 八六年
- (5) 上演された演目は、請神である「大出蘇」、「落籠簿」から「寶浴」（父子狀元）の「織錦回文」、「若蘭行路」、「目蓮救母」の「座砦」、「招朋」、「造土獅象」、「良女引」、「有聲駁仏」、「捉魂」、「過孤棲徑」、「舂碓地獄」、「火烘地獄」、「鉄磨地獄」、「全家昇天」の各折。尚、僧、道士による仏教・道教の宗教活動の一つであった「和尚戲」、「師公戲」の流れである打城戲も「目蓮救母」の「良女試雷有聲」、「掠魂」、「速報審」、「刀判地獄」、「打天堂城」の各折を上演している。打城戲は提線木偶戲から「目蓮救母」を移した。しかし打城戲だけがもつ折もあり、移人以前に折として独立したものを持っていたと考えられる。打城戲については稿を改めて考察したい。

(6) 王秋桂主編 財団法人施合鄭民俗文化基金會 九三年

(7) 陳枚「閩南傀儡戲音楽」『泉州木偶芸術』鷺江出版社 八六年他

(8) 望吾郷は道行、一江風は君を思う、子に教えを諭す、漿水令は部下を派遣する、斬殺する、爆発的な怒りを表現するといった用法の約束があるものもある。道教音楽に関して、陳梅生氏の御教示を賜わった。深謝致します。

(9)



(10) 拙稿「中国福建省泉州の嘉礼戯と梨園戯の「請神」「演劇学」三四号参照

(11) 黄奕缺氏(一九二八)は線功に秀で、一九五二年泉州木偶劇団に参加後、人形の体、糸、頭に改良を加え、自転車をこぐ、壺から酒を酌んで飲むなど様々な表現を可能にした。黄奕缺氏の功績としては人形と頭の表現術を高めたばかりでなく、三総合形式や一人で一つの人形を出遣う形式の創造もあげられる。

(12) 吳仕博「木偶意念」『南戲遺響』泉州地方戯曲社編 中国戯劇出版社 九一年

(13) 太田辰夫『西遊記の研究』研文出版 八四年

(14) 唐太宗入冥譚は、唐の張鷟『朝野僉載』巻六(『太平広記』巻一・一四六にも引用されている)、「唐太宗入冥記」変文(ス・タイン二六三〇)にみられる。変文は汚れ、脱落等があるが、その概略は次のようである。

唐太宗は戦で多数の人々の命を奪ったために入冥、冥界の判官催(崔)子玉は輔(逢)陽県尉で、太宗に寿命があれば長安に帰れるという。太宗は李軋風の手紙を催に渡す。催に導かれ冥界を進む太宗は第六曹司で泣き声を耳にし、催に尋ねると建威、元吉であり、太宗に恨みをもっているのだから入ってはいけない、入ると助けられないという。太宗は入らずに急いで廳に入り座す。六曹司が拝礼して去る。太宗は催に同席させる。太宗の生前の善行を調べる。六曹司去る。催は政官になれるやもしれぬと命禄に記された唐太宗の寿命を五年のはすと奏上、太宗は長安に戻り次第、催に贈物をするという。催は五年で錢物なら更に五年延ばせば政官になれるだろうと、唐太宗に李軋風が手紙で哀訴しているので更に五年たして十年にすると奏上、太宗は更に厚く贈物をするという。催は二度とも贈物だけで、自分に官職を与えと言わないので、皇帝は官職を惜しむと知った。どうすべきかしばし沈黙していると、太宗はいつ帰れるかと尋ねる。催は太宗に文書が必要と奏上、書き方の分からぬ太宗に、官職を得たい催はならば質問に答えられたら長安に帰れると、武徳七年兄弟を殺し、父を幽閉した理由を尋ねる。答えられぬ太宗に替って代答し、官職を要求、蒲州刺史兼河北廿四州探訪使、官は御史大夫になり、財物を与えられる。長安に戻ったら功德を修め大赦を下し大雲経を写経するよう奏上する。太宗は空腹を訴え、催は食事を準備するという。(王重民、王慶叔他編『敦煌變文集』巻二人民文学出版社 八四年)

「唐太宗入冥記」変文の発見された部分からは、唐太宗入冥の理由は玄武門の変(武徳九年一六二六年)、李世民が建成を尉遲恭が元吉を殺害し、李世民が帝位に就いた政変で帝位に就くまでに多数を殺害したためであり、地獄の描写よりも冥界の判官催(崔)子玉とのやりとりが中心になっている。注目されるのは催(崔)子玉の人柄だろう。催(崔)子玉は、民間信仰の崔府君と関連があり、崔府君関係の資料に太宗入冥に関連するものもある(高橋文治「崔府君をめぐる」元代の廟と傳

と文學——『田中謙二博士頌壽記念中国古典戲曲論集』汲古書院九一年）『朝野僉載』では判官とだけで名前はないが、入冥以前に太史令の李淳風が太宗に崩御の近いことを告げ、太宗は寿命は定まったものなので憂うることはないと言う。『朝野僉載』でも判官は玄武門の変について尋ねており、唐代の太宗入冥譚の形が伺える。

(15) 前出太田辰夫「『永樂大典』本西遊記考」『西遊記の研究』研文出版 八四年

(16) 貞觀十三年、長安の西南にある涇河のほとりに、二人の漁翁張梢と李定がいた。張梢が李定に、西門の裏の易者先生に毎日鯉一尾で網をかける方位を教わり、そこに仕掛けると百発百中だと言う。その話を水中で聞いた巡水夜叉が龍王に報告、龍王は激怒して白衣の秀士に変じ、易者先生袁守成の所へ行く。いつ、どれぐらい雨がふるかを尋ね、当たるかどうかで五十兩の銀を賭ける。水晶宮に戻った龍王に、黄巾の力士が玉帝の降雨の命を伝える。それは袁の見立てと同じだった。龍王は袁から五十兩をとろうと、わざと降雨の時と量を変え、再び秀士に変じ、袁守成を尋ねて金を出せと迫る。袁は自分の見立てに誤りはなく、お前が天の掟を犯して変えたのだと言う。龍王は怒って正体を表わす。袁は少しも動ぜず、天の掟を犯した罪で殺されるぞと言うと、龍王は後悔して秀士の姿に戻り袁にどうすべきか教えを請う。袁は唐の丞相魏徵が刑を執行するから太宗と魏徵に頼めと教える。龍王は礼を述べ去る。玉帝は魏徵に執行を命じる。夜、太宗の夢に龍王が現われ命乞いし太宗はこれを許す。翌日尉遲敬德（恭）を召して昨晚の夢を話し、魏徵を召して一日後宮で碁をうって龍を助けると言う。魏徵を召し、碁をうっていると、午時近くになって魏徵が居眠りをし、未時まで眠ってしまった。目覚めた魏徵は太宗に非礼を詫び、また碁をうつ。外が騒がしい。何事かと太宗が問うと、千步廊南十字街に雲の端から龍の頭が落ちてきたと報告、太宗は驚いて魏徵に問う。魏徵は玉帝の命を受けたので、背けば自分もあの龍と同罪、眠っている間に龍を斬ったと奏上、太宗は救いたかったがだめだった。そして碁をやめた（前出太田辰夫「『永樂大典』本西遊記考」一六六—一六八頁）

(17) 明世徳堂本西遊記と同じ題材を扱った清の伝奇『釣魚船』、内府劇『進瓜記』等内容の比較は磯部彰先生が「第一節『釣魚船』と『進瓜記』——清代内府劇の一断面」（磯部彰編『中国地方劇初探』多賀出版九二年）で詳述、分析されている。

(18) 大鼓書「李翠蓮盤道」など、この僧を唐三蔵法師とするものもある（澤田瑞穂「大鼓書私録」『李翠蓮故事唱本考』『中国の庶民文芸藝——歌謡・説唱・演劇』東方書店 八六年）

(19) 前掲書

(20) 八五年に山西省で発見された『迎神賽社礼節伝簿四十曲宮調』にみられる。廖奔「第四編 宋元祭祀演劇遺俗」『宋元戯曲文物与民俗』文化艺术出版社 八九年

- (21) 容世誠「移民集团的宗教活動和演劇文化 以新加坡興化人為例」『寺廟与民間文化研讨会論文集』中華民國 八四年
- (22) 表記は、流布地域／歴史など形成過程 になっている。
- (23) 『清蒙古車王府藏曲本』首都図書館編 北京古籍出版社 九一年
- (24) 前出磯部彰「第一節『釣魚船』と『進瓜記』——清代内府劇の一断面」磯部彰編『中国地方劇初探』多賀出版 九二年